

都情研の今年度を振り返って

東京都立学校情緒障害教育研究会会長

文京区立小日向台町小学校校長

小川 深 雪

平成二十三年四月二十六日、大田区立嶺町小学校において都情研の総会が開催され、本研究会の活動がスタートしてから一年が経とうとしています。

今年度は「東京都教育委員会研究推進団体」としての認定、さらに、夏の七月二十八、二十九日の二日間におわたって行われた「全国情緒障害教育研究協議会 東京大会」もあり、本研究会としての活動が大変充実した記念すべき年となりました。

大会テーマ「自閉症スペクトラムの学校教育の明日を考える」特別支援教育時代における自閉症への生涯にわたる支援」のもと、第一日目の国立オリンピックセンターには、全国各地から約六百人の参加者があり、二日目に行われた八会場における分科会①就学前における自閉症

の支援②特別支援学校における自閉症の支援③特別支援学級における自閉症の支援④通級（小学校）による自閉症の支援⑤通級（中学校）による自閉症の支援⑥通常の学級における自閉症の支援⑦高等学校・大学等における自閉症の支援⑧関係機関における自閉症の支援》においても、実践発表・助言と講義を通して自閉症（発達障害）について学びを深めることができ、大きな成果をあげることができました。

東京から特別支援教育や「通級指導」のあり方について、様々な分野で積み上げられた実践を全国に発信する大会になったと思います。ご講演いただきました目白大学人間学部こども学科教授山崎晃資先生、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課石塚謙二先生、シンポジストの皆

様に、心よりお礼を申し上げます。

本大会の成功の陰には、大会の成功を願い、大会実行委員長の杉並区立大宮小学校曾我部和広校長先生を中心に準備にあたられた実行委員の皆様、多数の会員の、並々ならぬ尽力があったことと思います。心から敬意と感謝を申し上げます。

会員一人一人の熱意があつたからこそ、東京大会の成功がありました。そして、この熱意と成果はその後の各部の活動・研修会に反映され、各部の活動も活発に行われたことを喜び合いたいと思います。

また、今年度も東京都教育庁指導部総括指導主事の市川裕二先生に、東京都の特別支援教育の現状・課題を踏まえた「東京都特別支援教育推進計画第三次計画」についてご講演いただき、理解を深めることができました。

最後になりましたが、東京大会はもとより、一年間ご講演、ご指導・ご支援いただきました諸先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

お知らせ

◎平成二十四年度東京都立学校情緒障害教育研究会 定期総会

四月十六日（月）二時開始

国立オリンピック記念青少年総合センター大ホール

◎特別研究部夏季研修会のお知らせ

*八月一日 十時～一二時四十分

狛江市エコルマホール

安部博志先生（筑波大学付属大塚特別支援学校）

「通常学級の担任が教室で行う特別支援のアプローチ」具体的な教材から

見えてくる支援のポイント10」

*八月一日十三時五十分～十六時半

月森久江先生（杉並区立済美教育センター）

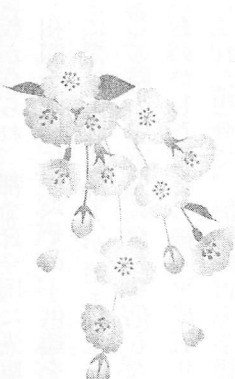
「発達障害について寸劇から理解を深めよう」

*八月二日 十時～十六時半

渡部匡隆先生（横浜国立大学）

「児童・生徒の行動問題の理解と具体的な支援」応用行動分析の視点を交えて」

※申込書は四月より配布し、締切は七月六日です。通級の先生方とともに、通常学級の先生方の参加をお待ちしております。



自閉症・情緒障害学級で指導を続けて

あなたに伝えたい大切なこと

世田谷区立松原小学校 石川恭子

現在、都の特別支援教育第三次モデル事業が提案され、通級指導学級の今後が様々な場面で議論されています。今までも特別支援教育の本格実施など、通級指導の学級の在り方はその都度の状況に合わせて少しずつ形を変えてきました。一方、目の前の子どもたちへ精一杯の支援を行いたいとは思いますが、受け継がれてきたものではないでしょうか。

そこで、情緒障害にかかわる通級指導学級などがどのような歩みを行ってきたのかを振り返ることで、日々の実践を見つめ、次の歩みに方向性を見出す機会にできたらと考え、寄稿文をお願いしました。

通常学級の先生方にも、通級指導の様子を知っていただくとともに、学級での指導への参考にしていただける内容にもなっていると思います。ぜひ最後までお読みください。

～広報部～

一、はじめに

私は通級制の自閉症・情緒障害学級でずいぶん長い間指導を続けてきました。(以下・情緒障害学級と略)

特別支援教育が始まって五年目に入ります。それ以前の準備期間を含めてこの八年位の間に東京都の情緒

障害学級は大きく変化しました。通級児童が急増し、通級の情緒障害学級が増え、当然ですが指導を担当する教員も増えました。情緒障害教育の経験が五年未満の教員が半数を占める現在、長く指導を続けてきた教員から新しい教員へ、経験の中から大切と思える事を引き継ぐ事も大切と考えています。

「この教育に携わり始められたあなたへ」そんな思いで書いています。

二、通常の学級へ波及する教育の流れの中で

特別支援教育が導入されて以来、特別支援教育・特別支援学校・特別支援学級等の用語が耳慣れています。が、それ以前は、心身障害児教育、心身障害児学級、養護学校という名称でした。

情緒障害教育は昭和四十三年に杉並区立堀之内小学校で始まりました。通常の学級に在籍する自閉症児が指導の対象でしたが、まだ養護学校はありませんでした。その後、重い障害を抱えている子供たちも平等に教育を受ける権利があると養護学

校が作られ、都では全国に先駆け昭和四十九年にすべての子供達を学校に受け入れる全入が始まりました。

この時の障害児教育の変化も大きなものでした。その後、平成五年に出された法令で、情緒障害児学級の対象は通常の学級に在籍可能な者と定められ、通級する子供たちの様子も変化してきました。平成十九年に特別支援教育が始まると通級希望者が急増し、発達障害の子供たちの割合が増えていきました。

私が体験したこの一連の教育の流れは、一言でいえば、特別支援教育が教育を区別することなく、限りなく通常の教育に近づき融合していくノーマライゼーションの潮流に乗っているという事実です。同時に、この流れの中で情緒障害教育は、この幅広い名称ゆえに受け皿が広く、自閉症児・緘黙児・不登校児・発達障害児・虐待待児などいろいろな子供たちが入級してきました。そして、今後も様々な子供たちを引き受け指導していくことが予測されます。近い将来、初めて聞く障害名の子供たちが入級してくるかもしれません。

大切な事は、子供たちに真摯に向き合い指導実践に励みながら、新しい知識を得るため、日々研修をしていくことだと思います。子供たちの実態を知り、その指導法をまず知識

として知っていくことは、情緒障害教育に携わる教員の指導力の土台のように思います。

三、指導力の土台として必要な事

(一) 障害の知識と指導法の習得

現在、都情研の実態調査を見ると、自閉症以外の児童生徒が多く、診断なしで入級している様子が分かります。そして、情緒障害学級が通常の学級で集団不応になっていく子供たちを引き受けていることは、今後も変わりません。障害で決めつける必要はありませんが、少なくとも、集団不応状態の原因の背景を理論的に推測するためにも、発達障害の知識とその指導方法について知っていくことが必要だと思います。都情研や都研の研修はもちろんですが、それだけでなく、より積極的に研修していくことをお勧めします。先進の知識を得る為には、いろいろな研究団体がありますから入会するとよいと思います。また、さまざまな研究書、自伝、指導書が出ていますから、参考にするのもよいと思います。障害関係専門書店や出版社がありますから、検索してみてください。

私が、情緒障害教育に携わった時、入級児童は自閉症児が大半を占め、自閉症の原因が、親の育て方等の心因説が退けられ、脳の機能障害であ

る認知障害説にほぼまとまつてきた時期でした。この為に、認知力を高める指導や、行動療法が主流でした。その後、脳科学の分野でいろいろな知見が出てきて、感覚統合療法が提唱されるようになりました。現在、実行機能障害（遂行機能障害）は脳科学の知見からのキーワードとなっているように思います。私自身の衝撃の体験は、二十年前に自閉症の方々の自伝が出版されるようになりました、その内面を知ったことでした。感覚過敏等体験者が語らなければ分らない内容でした。また、身体意識や自己意識の希薄さも驚きでした。

その後、情緒障害学級には、注意欠陥多動性症候群、アスペルガー症候群、学習障害等のさまざまな診断をつけられた子供たちが入級してきました。その実態を知るための研修は不可欠でしたが、指導法は、今までの情緒障害教育で培ってきた内容が十分活用できるものでした。例えば認知面からは分かりやすい指示の出し方（視覚的な認知が得意なので、言葉だけでなく文字や図等と活用するなど）、行動療法からは行動の修正をする為に、よい行動を取った時に行動を強化する御褒美を与えることなどです。そして、この行動療法は形を変え、現在もペアレントトレーニングやABA（応用行動分析）

の手法等で注目を集めています。また、視覚的な理解が得意な面は、コミック会話等で活用されています。診断でも、高機能自閉症、アスペルガー症候群、注意欠陥多動性症候群、学習障害は別のものであるというのが、現在は、重なっていることもあるという説が有力になってきているようです。

このように障害名も診断も指導法も変化していきませんが、日々情報を集め対応していくことで、また有効な指導法も分かってくるように感じています。

(二) 児童発達の知識

発達アンバランスな子供たちを指導していくので、零歳からの児童発達の知識が必要になってきます。児童の定形発達の知識が、目の前の子供たちのアンバランスな発達の様子に気づく力となります。小学校入学は六歳ですが、入級してくる子供たちは六歳以前の段階で伸び悩んでいる場合が多くあります。どの面で難しいのか、子供の実態を正確に判断する物差しとして児童発達の知識は大切となります。

(三) いろいろな心理検査の知識

子供を詳しく知り、自分の視点を明確にして有効な指導をするために、また他の先生方と共通に協議出来るように、数種類の心理検査結果

が理解できるように研修をすることをお勧めします。代表的な検査に、WISC・K-ABC等の心理検査があります。これらの検査は現在新しい版に改訂されましたので、新しいバージョンの検査知識も必要かと思えます。

教員にとって、これらの検査結果が読める事は、自分の担当する子供の行動の理由が分かり、指導目標を立て易くなります。

例えば「子供の行動から、視覚優位で言語が苦手な事が分かっていたが、やはり検査結果からこの傾向がはつきり分かった。言語の中でも、特に概念化していく事が苦手なことが分かった」というように、子供の分析的に理解することは、子供の指導を的確に行うための力となってきます。

四、実際の指導場面で

(一) 情緒障害教育で指導する内容

情緒障害教育の指導内容は、自立活動と教科の補充です。指導時間も短く、教科書もありません。

自立活動は平成二十一年に改定され、新たに人間関係の形成や環境の調整等、発達障害を見据えた項目が加えられました。けれども、指導項目は挙げられています。指導内容は、詳しく書かれてはいません。ま

た自立活動は、さまざまな障害の自立的な克服のための指標なので、情緒障害教育でそのすべてを扱う必要はありません。教員は子供の実態をとらえて、その子供に必要な指導をしていくこととなります。

(二) 指導評価・記録の重要性

現在、都の情緒障害教育では、長い指導実践から効果的であった指導方法が引き継がれています。

情緒障害教育に初めて足を踏み入れた先生は、先輩の指導を参考にして指導をなさっていると思います。今後、指導実践を深められる為に、指導を分析的に組み立て、指導評価をしていく視点が大切だと感じています。

「指導目標は適切であったか。子供たちに分かりやすい指導であったか。この指導によって、子供たちはどのように変化したか」指導を客観的に把握し、自分で振り返ったり、学級のメンバーと話し合ったりすることは、子供の見方を深め、より子供の実態把握を正確にし、指導実践を深めていくための大きな力となっていくと思います。

情緒障害教育は、子供の実態に基づいて自立活動や教科の補充の指導をするので、とても裁量範囲の広いものになっています。この為に、指導後の評価が必要になります。指

導後に必ず分析的に評価する姿勢は、長い年月のなかで、子供の見方と指導力を大きく伸ばしていくと感じています。

そして、新人の先生には指導記録を書く事をお勧めします。初めは、すべて大切のように思い、記録が長くなるかもしれません。しかし、書き続けていく中で、指導のポイントが見えてきて、記録もポイントを押さえて書くことができきます。この時は、先生が、児童の実態を把握し指導目標も見えてきた時期と重なります。

(三) 長期・短期目標と指導内容

指導目標と指導内容の設定は、実際はとても大変なことです。目標も長期と短期に分かれます。子供の実態を把握し、指導目標と内容を設定することは個別指導計画を作成することと同じです。初めは難しいと感じるかもしれませんが、必ず作成し、子供の変化を評価して下さい。あまり変化していない場合には、指導目標があつていないか、長期の指導目標である場合が多いです。また内容が目標にあつていない場合もあるかもしれません。

本教室では、自立活動が改訂されたから、教室の指導と自立活動の内容がどのように関連しているか調べてみました。その結果から、人間関

係の形成を中心にしながら、さまざまな項目をからみ合わせながら指導が組み立てられていることが分かりました。例えば、運動指導では、単

に身体の動きの改善だけでなく、自己意識の土台を育てるために、自分で選択することや、相手の動きを見る学習も一緒にしていました。これは、本教室の指導が子供の自己意識を育てながら、自分の長所を分かり、また短所も受け入れ、自分で対処法を見つけられるようにという目標からきています。実際このような指導方法で、子供たちは今までできなかったことができるようになって自信が芽生え、その自信が自分の苦手さも受け入れる姿勢に変化していき

ました。分析的な視点では、自己意識の育成は長期目標で、身体の動きの改善や自己選択などは短期目標です。このように、情緒障害教育には、長期間の指導時間を必要とする指導と短期で改善可能な指導があります。また、指導を分析的に考え把握していくことは、指導プログラムを作っていくことにも繋がります。指導プログラムの要諦は、スモールステップで、発達の段階を踏まえることだと感じています。

(四) 生涯教育の視点と連携

情緒障害教育での指導は子供の障害をなくすのではなく、障害を軽減

し、受け止め、学校や社会で自立的に生きていくための力を育むことにあります。この為に、保護者や在籍校との連携を図り、子供たちの実態を伝え環境調整していくことと、生涯教育の視点が大切になります。個別支援計画の作成が提唱されていますが、自分が教えた子供たちが成人になり社会で尊厳を持って生きていくために、今どんな力を育てることが必要なのか、保護者の方と一緒に探りながら歩む事が大切だと感じています。これはとても大変な事です。子供の担当制を敷いている情緒障害学級担任ならではの仕事だと感じています。

五、おわりに

若き日に、都情研に参加し感じることがありました。それは、研究会の雰囲気的自由で、さまざまな先生方が参加されていることでした。私も先生方から指導を受け育てられました。そして、何よりも私の先生だったのは、教えた子供たちであつたと思います。

私が体験したノーマライゼーションの流れは、教育現場にも届き、現在、多くの先生方が通常の学級担任から情緒障害学級へ異動なさつていきます。今後、通常の学級での経験にさらに情緒障害学級の経験を重ねら

れ、通常の学級へのより深いコンサルテーションがなされていく事を願っています。

感謝をこめて、この拙文を終わります。

◎第四十五回全国情緒障害教育研究協議会島根大会

*大会テーマ・趣旨

「一人一人の自立につながる支援の充実をめざして、実態のとらえ方と指導・支援、連携のあり方を探る」

*期日

平成二十四年八月二日(木)三日(金)

*会場

島根県松江市 島根県民会館

*内容

◇記念講演講師

浜松医科大学児童青年精神医学講座特任教授 杉山 登志郎氏

◇基調講演講師

文部科学省特別支援教育調査官

◇シンポジウム

コーディネーター

島根大学教授 肥後 功一氏

◇分科会(五分科会)

発達に課題のある乳幼児に対する早期の気づきと支援、LD・ADHD等の子どもに対する支援、自閉症(アスペルガー症候群・高機能自閉症)の子どもに対する支援、自閉症(知的な遅れのある自閉症)の子どもに対する支援、LD・ADHD・自閉症の青年・成人に対する進学・就労支援

活動報告

＊庶務部（担当Cブロック）

千代田区立千代田小 若林 浩

○経費削減：封筒の再利用。定期総会資料の冊数減。学級名簿を手刷り、新設校と必要部署のみ配布。既設校は新設校一覧を旧学級名簿に差し込んで対応。

○関係会議の開催：幹事代表者研修会四回、合同幹事研修会三回、部長副部長研修会七回。地区委員研修会四回。定期総会。

○設置校長会の開催：四回、内三回は特別支援教育指導課統括指導主事市川裕二先生の講演と懇談。

○教育研究普及事業：東京都教育委員会研究推進団体として認定され、研究成果を都の教員が共有できるように普及する使命を担う。普及のための経費が支給され、研修会等に担当指導主事の派遣を要請できる。

○国立オリンピック記念青少年総合センター：児童青少年団体として認定され、センターを研修会等の会場として利用できる。

○全情研東京大会実行委員会：大会開催に当たり各ブロックから当日の運営協力者を募って協力した。

＊会計

墨田区立第三寺島小 大月理加
墨田区立吾嬬第一中 玉井智幸

2月末現在において、昨年度より引き続き各都担当の皆様のご協力、ご尽力によって、計画通り予算の執行をすることができています。分担金収入の増加が見込めない中、支出を抑え、経費削減をすることは、次年度の研修や広報など、活動の継続と促進に繋がるかと思えます。今年度の皆様の取り組みに心より感謝申し上げます。

全情研からの協力もあり、次年度の予算編成に若干のゆとりをもつことができていますが、引き続き、可能な部分の節約と計画的な予算の運用が求められます。次年度もご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

＊設置校部

練馬区立旭丘小 坂井英子

設置校部は、情緒障害学級担任の専門性を高める場として、年間五回の分科会と担任総会、通級入門研修会、夏季集中研修会、本年度より試行的に始めた各区市町村別研修会を実施しました。

本年度も四分科会（コミュニケーション指導、運動・音楽等、発達障害、思春期対応）に分かれて研修を行いました。各分科会で年間テーマを設定し、講師等を招いての専門的な研修や実技研修、施設見学、各学級の指導実践の紹介等を行いました。各分科会のテーマは次の通りです。

＜コミュニケーション指導＞
●社会性を育てるコミュニケーション指導の工夫

＜運動・音楽等＞
●感覚教育の流れの中の運動・音楽指導

＜発達障害＞
●情緒障害等通級指導学級担任の専門性の向上

＜思春期対応＞
●思春期（不登校・発達障害）児童・生徒の理解と対応

各分科会の活動内容は、「分科会報告資料」として冊子にまとめます

ので、ご覧下さい。

夏季集中研修会は二日間の通いで実施しました。講演会は、小林玄先生（東京学芸大学）に「通常学級の学習につまずきのある子への支援」という演題でお話いただきました。公開ディスカッションでは、学期始・終の指導や報告書、在籍校訪問、保護者の対応等についてディスカッションを行い、その後、約7～8名位のグループに分かれてグループ討議をしました。午後には実技研修を行い実りの多い会となりました。

近年、情緒障害学級の新設や学級増により、新しく情緒障害学級担任を経験される方々が大変多くなりました。本年度の通級入門分科会は六月に二会場（小・中学校別）で行いました。小学校は「通級指導学級の指導と役割」、中学校は「中学校の通級指導学級（不登校・発達障害）について」という演題でベテランの先生にお話いただきました。

講師の先生方、各分科会世話人等の方々のご協力により、本年度もこれらの活動を無事に行えましたことを感謝の気持ちを込めて、ご報告いたします。



***対策・調査研究部**

八王子市立松が谷小 長澤雅彦

東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画を受けて、平成二十四年度から、特別支援教室のモデル事業の実施準備が始まります。モデル事業は平成二十五年度～二十六年年度の二年間の実施及び検証の予定で、最終年度にはガイドライン作成を目指しているとのこと。

東京都教育委員会の構想には、通級学級教員による巡回指導や拠点校方式による教員配置等従来の指導の在り方にも多きな影響を及ぼすと思われる内容も含まれており、本研究会がこれまで積み上げてきた実績をいかに確保しつつ発展していくのが今後の課題となっています。

対策・調査研究部ではこうした動向を踏まえ、今後も会員の皆様への情報提供や研修を進めて参ります。

五月 学級実態調査の実施

情緒障害等学級在籍の児童・生徒数の増加傾向は続いております。また、情緒学級の経験年数が浅い先生方が多く、専門性を高める研修の必要性が浮き彫りになっています。

中学校卒業後の進路についての難しさも各方面から出されています。引き続き調査へのご協力をお願いします。

たします。

五月・二月 教育課題研究協議会

都内特別支援学校及び特別支援学級の研究団体が集まり、情報交換及び研修を行いました。

六月 三者連絡協議会

都情研と都弱視教育研究会、難聴言語障害教育研究会との研修を行い、連携を深めました。

八月 都教育庁との意見交換会

東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画の内容について、また主に中学校情緒障害等学級に在籍している生徒の実態や進路についての意見交換を行いました。

第三次実施計画についてこの時点ではモデル事業の公募について検討しているという段階でした。(その後十一月に特別支援教室モデル事業についての説明会がありました)

十一月 担任研修会

東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導統括指導主事の市川裕二先生をお招きして、第三次実施計画の進捗状況や内容についてのご講演をいただきました。自閉症・情緒障害学級の指導内容の研究・開発事業、発達障害のある児童・生徒の指導法の研究・開発事業についての詳しい説明をしていただきました。

***特別研究部**

練馬区立光が丘四季の香山 福岡優紀

二十三年度は、年間テーマを「通常学級で配慮を要する児童生徒への具体的な支援」とし、講義形式だけでなく、活動や体験を取り入れた研修内容を企画しました。

八月九日・十日に三鷹公会堂で行われた夏季研修会では、第一回研修会に療育塾ドリムタイム主宰木村順先生、第二回研修会に早稲田大学大学院教職研究科講師長岡恵理先生、第三回研修会にまめの木クリニク河内美恵先生、第四回研修会に翔和学園教育ディレクター伊藤寛晃先生をそれぞれ講師に迎え、ご講演いただきました。猛暑の中、五〇〇名近い先生方がご参加下さいました。研修会アンケートには「もつと話を聞きたかった」などの声が多く寄せられました。

来年度は、一つのテーマについて深く学ぶことができるよう午前午後を通して一日研修会などを企画していきます。参加者に満足していただけるような実り多き研修会を開催していきたいと考えております。

***広報部**

調布市立柏野小 大島 知

情緒障害等学級の先生方だけではなく、通常学級の先生方にも役立つ情報を提供するため、総会及び夏季研修会の三つの講演の要旨を掲載しました。また、今号には、通級指導の在り方をあらためて考える機会として、寄稿文をお願い致しました。

予算厳しい中、毎号六ページでの発行、各校一部ずつの配布が続いています。より多くの方々に読んでいただけますよう、今後も各校での増刷り等のご協力をお願いします。

情緒障害学級の先生方には、「みちびき」を介して通常学級の先生方とより一層連携をとっていただく等、有効利用をしていただけると幸いです。

編集後記

来年度も、より分かりやすい、活用しやすい誌面作りに取り組んでいきたいと考えています。みちびきに關するご意見をお寄せください。

042?488?2861

調布市立柏野小学校
編集・発行 広報部
印刷 ㈱ワールドミーティング